



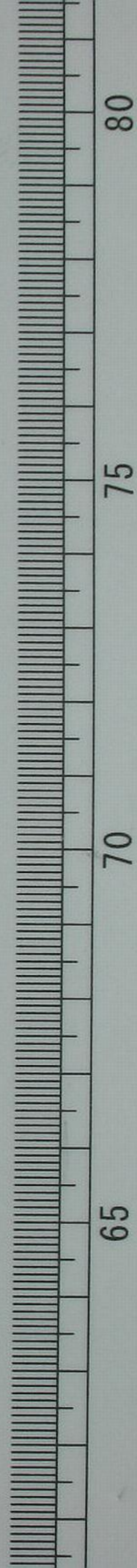
俗通

渡邊義方編輯

日本小史

葦初編

下



65

70

75

80

A557
2



48-8433

通俗日本小史初編之下

東京

渡邊文京操 編

却説義朝清盛の白河殿の火を放ち焼討たりし押寄る
 事能く敵を次
 第に乱し入るも今拒み策盡て上皇如意山に落
 延たす為義以下諸將跡を慕ふて守護を成上皇
 諭して離散せしめ翌日髪を削りて僧となり仁和寺
 に至る途中遂に捕へらるて讃岐に流さる 再来崇徳
 悔悟るし浮世を捨て佛門に入り法を修むるに三年

通俗日本小史初編

親ら五部大乘經と書して法親王覺性が許し送り安
 樂壽院に藏んと請ふ朝議之を許さば丹精筆めく書
 たまひ一大乘經を送却せしむ崇徳大に恚り鬢髮逆
 立ち目眦裂け此世うらるる魔道に入り天下を惱亂
 多し吳んと齒を切なる惡鬼の面色夫より一間に筆居
 て髮を剃ら爪を剪せ断食まりて三週間一心不乱に
 經を誦し魔王を祈りて在りるが其満願の期日は當
 り一聲苦と叫ぶと齊しく満面は怒りを含みその俛
 崩御ありたまふ雨後逆乱相繼ぎ災變荐に至る怨魂の

崇りを恐ろしく謀主頼長に命辛々漸く困るは
 抜つ東を指て落行途中流矢は當つて死を為義は又諸
 子と俱に義朝が許し匿る骨肉同胞相敵視し吳越の
 思と為たるも王事は勤し心へ一ツ親子の情義捨る
 くたれ己が軍功に代え父が罪を購ふんと義朝屢々
 請ふ朝議曾て聽さぬのまゝ清盛を以て其叔父平
 忠政を誅せしめ而して義朝は父為義を誅せしと論言
 背くま背くま詮術なくく義朝は其臣鎌田政家は
 命して父為義を誘殺せしむ大逆無道といふを父は

するは難き忠と孝捨べき者へ弓矢あり爰は又為朝
 鎮西は走らんとせし途より平氏の捕兵は捕へ
 らし死一等と減し其腕の筋を抜き大島は流さる為
 朝脅力減びと雖も殊は箭の長きを用ひまはしく射術
 は妙を得て天子我は大島を賜ふと稱し傍の五島を掠
 奪し恩威を以て島民を撫育けまはしく跋扈たりし
 が此事迅く由京師は聞え為朝追討の總大将狩野
 工藤茂光勅命を奉じて馳向ふ舳舻相並んで浪を蹴
 立て曳声揚て攻寄り其時為朝弓杖は絶り此方の

磯邊は突立上り沖の方と見渡せば一隊の兵士二百餘人
 射向の楯を指翳し渚近く潜寄て其距離三丁計りを
 隔てたり矢壺猶遠れどいひや此世の思出は寄手の
 膽を冷さしてんと大刈股の矢と交え脊を眩の廻る
 程満月の如く牽絞り飄フツと射て放てば水際五寸置
 て兵艦の腹を彼方へ突と射貫たり響は傾く左右の
 矢目より潮どつと流き入り忽地我破と覆り二百餘人
 の兵卒の水は溺れ消失つ大魚の腹中へ葬らる底
 の藻屑とありまはる大將茂光此体は舌を揮ひて忙を

日本書紀



よ のたふ 世と憤りて
もく てんま 宗徳帝魔
道 どう 入 か 隘 つ

く艦を返して遠巻く續く寄る者あり為朝
此間何地行らん影を隠し其終る処を知らざ或
逃まて琉球に入り舜天王の其子なりとりん憊て乱
黨の盡く平ぎ夫々處刑せりまうり世之を保元の乱
とりん皇子守仁立つ之を二條天皇とるま保元以来
平氏の叡望盛んよして源氏の有ども無が如く義朝深
く憤り心快々として樂まば右衛門尉藤原信賴其昔
後白河上皇の寵遇厚く権を誇り勢ひ強特人致見
ると塵芥の如く驕肆の拳動るる也多し人綽名して悪

右衛門と呼ぶ曾て大将の官と望ん上皇は請ひ既
任ぜらんとせしを少納言藤原通憲唐の安祿山が事
蹟と引き痛く諫め拒りし其議は為破たり信
頼深く遺恨を思ひ密に黨與と語ら入折り義朝通憲
が女を娶らんと婚姻の事を言入し通憲之を肯
ぞ却つて清盛と婚と結び深く平氏と庇護を以て義
朝大に怒ると聞き好黨與を得りしと與に相結び時
機を窺ひ事と拳んと隠謀るるを知らざれを頃々
平治元年十一月清盛重盛以下平氏の一族熊野の社

二詣でんと京師を出る虚に乗て豫て計り義朝を
 五百騎を以て不意に起り即夜三條殿を圍て火を
 放ち又通憲が第に押寄せ捕へて遂に擊殺す上皇
 及び帝を宮中の幽閉せ去程に事變を聞て清盛重盛
 何れ猶豫のするべきや直に京師に引歸し密に謀り
 夜に紛て帝及び上皇を出し參らせ清盛に勅して賊
 を討しむ是時當りて信賴自ら大臣大將となり義
 朝を拜し播磨守とし勢に朝廷を凌辱せり清盛乃
 ち兵三千騎を三手に派ち重盛教盛賴盛を以て分ち

て之を將たりし清盛自ら全軍を勅して大内へと
 攻寄り賊もまた兵を分ち諸門を鎖し固く守り殺
 氣を會んで立上る源家の白旗林の如く官軍之を望
 見て少くも撓んで色めたる渡り進を兼たる形況に重
 盛嚴と焦立て今年に平治にして戦ふ土地に平安城
 而して味方の平氏より幸先たる此吉兆勝を獲んと
 疑ひぬ玉とあらざるも瓦礫とるつと生る
 むらと死ねや兵卒進めくと捨るをうりし摩配打
 振り我に續けと騎出ま此勢ひに勵まされ夫大将

を撃たまると先を争ひ朱きまを待賢門は逼りつ喚き叫
 んで挑む戦ふ望む処の敵將重盛雄と一挙に決せ
 んと跳り出たる一個の勇將是則ち別人ありぞ義朝
 が長子悪源太義平見参せんと薙刀うち揮り重盛日
 菟て渡り合ふ心得たりと一上一下軌は劣らぬ龍虎の
 争ひ陰は開けべ陽は閉ぢ秘術を尽す奮撃突戦血を
 流して杵と漂ひ一屍の積で累々たるいとも烈に乱
 軍の追つ逐はるる中の一騎討るる一期の浮沈未
 ど勝負も見え分ぞ戦ひ勞して重盛へ刃を引て逃走

るを卑怯し返せと呼掛く韋駄天走り義平は鎌田
 政家とわろともは逃し一せと逐たりる重盛今の逃
 る道なく馬を跳らし一鞭當て二條の濠を躍り越
 る俄透さば射掛る政家が矢坪違は重盛が背に癸
 矢と中りしうど甲堅くしる傷つるも矢継早ある政家
 は仕損たりと射掛る二の矢は乘たる馬を射倒せを
 鞍に餘され頭轉倒墮るを得たりと徒跳るが政家
 濠を躍超え競ひ菟りて薄り撃つ既は危急き其処へ
 馳付来る平氏の兵卒遮り戦ふ間を得て重盛漸く道

是出づ此時別隊賴盛を郁芳門に攻寄る且戦ひ且退
 き佯り逃るとも知らざれば鈍くも畏れ掛らばて源
 氏の軍勢數と盡し宮を捨る追撃るを透と窺ひ三の
 隊を教盛乃ち千騎を以て横合より押寄て難なく
 大内を乗取たり義朝義平賴盛と追走らせ手を空し
 く還りて見よは是は是の什麼に内裏の敵は乗取る赤
 旗天を掩ふをり源軍根拠を失つる進退既の谷る
 ののうら直し兵を引返し清盛が楯籠る六波羅さして
 隊伍を亂し揉み揉み下を押寄たり國家の危急存亡の

只此一戦ありあまば敵も味方も必死とあり火花と
 散りて未明より黄昏時に至る迄互ひよ一歩も退り
 を激戦凡そ十餘合源軍弱きよりつれど續く味方の
 あらざれば次第くは戦死なり刀の折と矢種の尽き人
 馬俱に傷と蒙り最早戦ふ氣力もななく勢ひ遂に極り
 ツ術計盡て義朝の義平政家等と主従僅に十一騎辛
 くも一方の血路を開き敵數多討取るさう行衛を
 東國路の尾張の國へと落る行く心の内ぞ如何なる
 ん義朝の第三子と頼朝とりの鬼武者と稱を此時年



日本
史
刀
編
六



日本
史
初
編
下

為朝ともが
 一ひとつせん
 箭やを
 兵艦へいを
 覆くわへま

甫十三歳實は梅檀の二葉より馥をい小腕をぐるも父
 より従ひ初陣の手始り敵二人まで撃取りが戦ひ敗走
 て父と俱に落行途中大膽ふも馬上よりうくとく睡る
 夢現驚き醒を追兵が逼り来りて要撃をまど電光
 稲妻接手も見せむ即座より四五人斬倒し跡を慕て父
 より追踵き山より山の間道を彼方此方と彷徨つ道は
 迷ひし折も折降積む雪は遮らる行も帰るも楢柴の
 如何なるらん頼朝の何地行らん影は見え心は
 懸念と搜める間なく親子爰に離散るし漸く青墓の

驛路より出で義平と信濃飛驒の間より遣へり頓て再び事
 を奉げ會替の恥を雪ぐんと頼朝は兵を募らしめ義朝を
 政家等と内海に至り長田庄司忠致は依り一夜の宿
 と求めつ時恰も除夜るとば忠致厚く管待して強くと
 止むる意に任せ滞留をまこと三日忠致は政家が舅よ
 て其子景致密に父を説勧め義朝を殺さんと謀る明
 らば永暦元年正月三日初春の祝と忠致儀式の筈
 を設けいと懇切に管待をぞ神ありぬ身の義朝は深
 き計較の有ぞとを努ふも知らぬ未明身を清人と衣脱

田村山典 初編 下

捨て裸体（むだり）より入り浴室（ゆずり）に入り浴室（ゆずり）の間を窺（うかが）ひて跳り
 出たる力士三人矢庭（やにわ）より義朝を搦んと獲物打振り飛
 菟る驚（おど）きまぐら由義朝へ先（ま）に進（すす）み一人の襟（えり）髪（かみ）掴（つか）ん
 て人襟（ひとえり）微塵（みじん）よるれと投付（な）る尚懲（おこ）せ間（ま）より左右（さゆう）より進（すす）
 む二人を是（これ）彼齊（か）しく小股（こまた）より搦（な）込（こ）め締付（しめて）き苦（くる）と一
 敵叫（たか）びーまぐ眼飛（まなこ）出て息絶（いき）たり此時遅（おそ）く彼時速（かたとき）一
 背後（うしろ）より窺（うかが）ふ景致（けいし）が突出（とつしゅつ）を鎗鋒（やぶら）義朝が振（ふる）願（ねが）く塗炭（ぬたん）膠
 腹（はら）を苦（くる）嗟（なげ）とをくり突貫（つとくわん）く急死（きゅうし）の痛（いた）手（て）より堪（た）り得（え）る
 倒（た）る処（ところ）と踏躑（ふみぢり）り遂（つい）に首（くび）を討落（うた）ま此時鎌田政家へ祝（いわ）

ひの筵（むしろ）より連（つ）りて舅忠致（おやぢ）とち路（ぢ）ぎ献（けん）つ酬（むか）ひの酒宴（しゆゑん）
 央（あた）此物音（このものね）を聞付（き）て何事（なに）やと起（お）ま（こ）ま（す）る忠致（おやぢ）夫
 と目配（め）せ（ら）む（せ）ば（ん）點頭（てんとう）く二人の酌取（しやくと）が物（もの）を言（い）む（ま）前後（ぜんご）よ
 り只一撃（ただひとつげき）と斬付（き）る（は）狼藉（ろうじやく）と言（い）せ（し）果（は）を尚（な）も（も）鋭（えい）く撃（う）
 込（こ）む（ま）矢受損（やうじゆん）下（くだ）たる政家（まさか）が肩先（かたさき）四五寸斬下（き）ら（し）是（こ）禿
 む処（ところ）と此方（このかた）へ得（え）たりと置（お）き懸（か）つ撃取（う）て二人（ふたり）が首級（くび）
 を京師（きやうし）より献（けん）下（くだ）其恩賞（おんじやう）を貪（あ）り忠致（おやぢ）父子（ふちう）が不忠不義（ふちうふぎ）
 憎（にく）む（ま）餘（あ）り（り）と虽（い）ち（も）勅命（ちよくみ）と云（い）ふ（ま）る（ま）る（ま）暴（あ）ら（ま）る（ま）父（ち）を弒（ころ）
 殺（ころ）せ（し）其罪（そのつみ）早晚（さうばん）輪（わ）り来（き）て其身（そのみ）も家臣（けしん）より殺（ころ）され（し）一

釋氏しやくしは所謂しゆゑ因果いんぐゑ應報おうえう豈いかで淺あは狹やき事ことありや再び説とく
惡源あくげん太義平たうぎへいハ飛驒ひびとに至いたりて兵へいを募もるよ忽たち地ち千余せんよ人と
得えたる故ゆゑ心こころよく勇ゆう立ち尚なほ兵士へいしを募もる折柄せうがら義朝ぎてう
既まづ死しまると聞きより聚あり来きり兵士へいしハ蜘蛛くもの子こを散ちま
が如ごとく皆みな四方しやうほうへ離散りさんるまふぞ義平ぎへい遺恨いこん遺方いほう多く俱か
不載ふざい天てんの父ちちの仇あだ遮さ莫もち清盛きよしげと一ひと太刀たちありと傷きずけ
ねバ死しまるとも止とまど心こころを決きし賤しせんき姿すがた身みを窺のぞひ奴隷と
とありと京師きやうしに入り三條さんじやう烏丸うまの邊へり潛ひ居ゐて密ひそ
る清盛きよしげを付狙つゐふと平氏へいし迅はやくも窺のぞひ知しり討手うての大將だいしやう

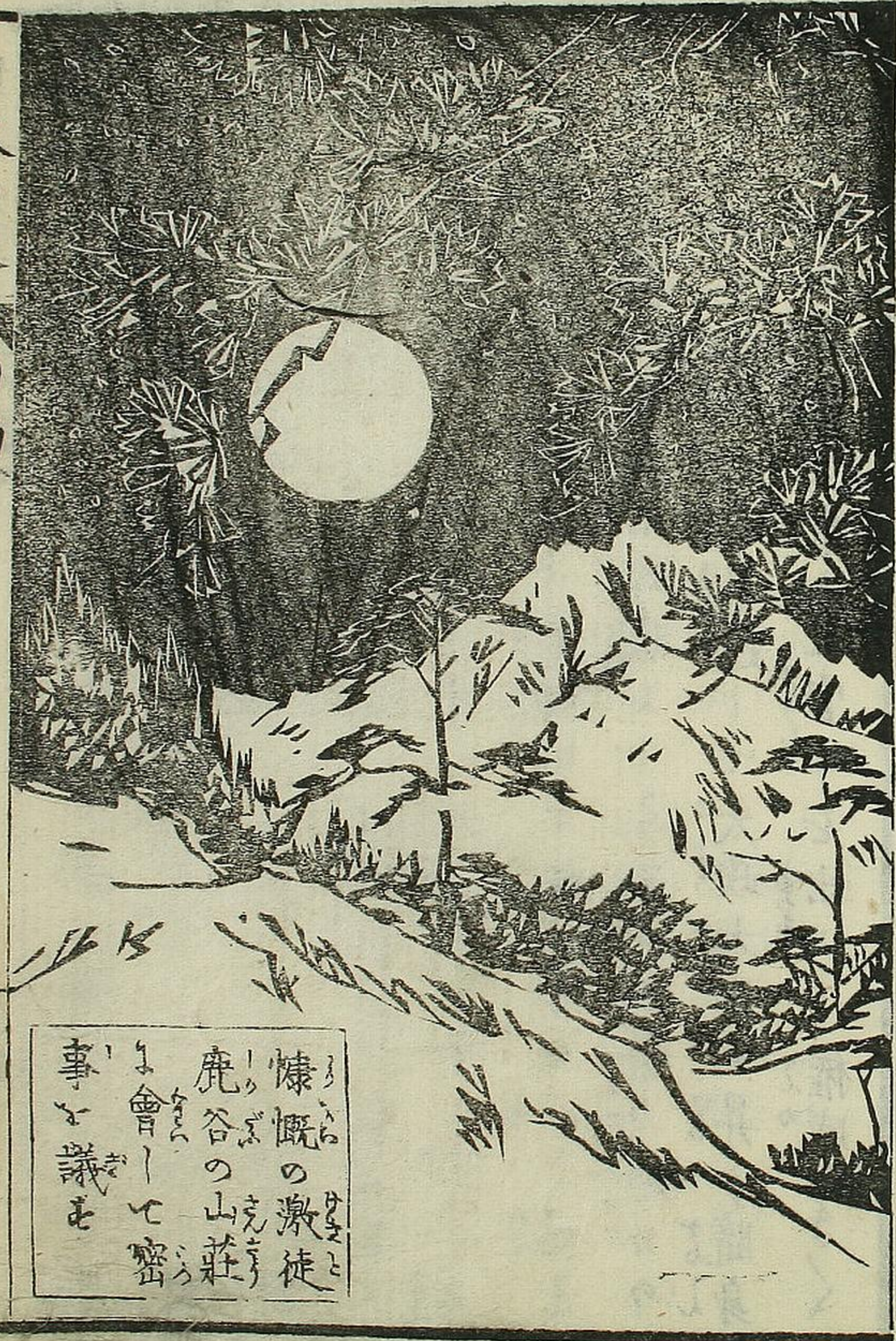
難波なんば經房きやうぼう三百騎さんひやくきを以もつて取囲とむ小賢き鼠ねずの輩たぐひ汝等なんぢら
如ごとき獲らんと隠持かくたる太刀たち引ひ抜き矢庭四五人やぢいごにん
斬き斃せし屋根やねへとり身を跳たらせ昇のぼると見みえ其終すまひ
姿すがた消きえて雲霞うんげ一ひとまづ東國とうこくに立た起たち晝々ひる山野さんやに潛せん
伏ふし種々しゆしゆの艱苦くわんくを嘗かつ夜道を急いそぐ逢坂山おうさかやま執念しつねんく
追来おひる經房きやうぼうが下知げちに従したがふ追兵おひの人数にんずう兩霞りやうげと射懸やる
矢鋒や義平ぎへい右手みぎての臂うでを射やら双を揮ふるふ自由じゆうあり
ぬを群むらり懸くる追兵おひの面々おもも折重せしむありと搦なめ捕とり六條ろくじやう磧がき
は拘引かひゆき遂つひは頭かぶを刎きられ義平死しし臨まり平氏へいしの

第を睨み詰り眼血走り憤怒の面色今もぞ思ひ知ら
して呉さんと云つた又を受たるるいと恐るべき形況
ありしと嗚呼惜むべし一個の英雄二十年を一期と
して空しく刑壇の露と消え蒼の花を散せしと自
餘の賊徒も誅は伏し平氏の叡望日月よ愈々益々盛
まり世之を平治の乱とり爰はまさし頼朝の峻岨き
山路は踏迷ひ父は外に出て只一人東國を指て父の跡
慕ふる落行く行路難平氏の追兵は捕へられ直は六
波羅は護送され既は斬罪と決りし成宗盛その幼稚

き成憐と清盛の後母池尼は請ひ特は死一等を減ト
蛭兒島へ流せし成世人喋々語つて曰く是虎の子と
山野は放つが如しと宜る哉後日に至り其説の誣
さる成知るとりし頼朝の弟希義の捕へらとて土佐
は流され同く範頼の藤原範秀の養子たるかゆふ
今般の罪は坐せしとぞ今若乙若牛若の三弟の父義
朝が妾常盤御前が腹よりく此時孰とも幼稚く清盛
常盤の色は弱を請がまふく三弟の命を助けく僧と
りし而して心は従へしむ斯て牛若年甫二歳父と母

日本書紀

神皇正統記



懐既の激徒
 鹿谷の山莊
 會して密
 事と議を



印本
 初編下

十一三

とい生別死別まご東西も知らぬ身の鞍馬山の寺院
 に入り名を遮那王と改めり佛門に入りりど未だ髪
 を削りりり此年天皇崩御ましく太子位は即く是
 と六條天皇といひ御年甫めて二歳未だ幼稚いま
 まはゆゑ万機の政務復び後白河上皇の手は歸り上
 皇の寵后滋子の清盛が妻時子が妹たる以て恐と
 多くも清盛の皇族の外戚より平氏の勢力は旭日の
 昇るが如く仁安元年累遷して太政大臣に昇り隨身
 兵仗を賜ひ輦車に乗りて宮中を出入り権威おきく

主上は異ありむ重盛も従二位に叙せり内大臣に
 任ぜり此時又當つて平氏の一族顯官に在る者百
 有餘人食邑全國の半を領し朝政盡く清盛は決て爰
 以上皇が北面の武士に西光といへる者あり平氏の
 專横を見て慷慨し堪むをなく上皇を教唆し詞巧と
 して説く舌の劍はやがて我上も及ぶと知るや白旗の
 源氏を思ふ上皇も心密り快よりのむ始めは愛し
 至ひも權を誇りて朝憲を蔑視るまこと奇怪なれ
 と稍清盛と隙を生じ不平を抱く折も折天皇崩御あ

王さるより後白河上皇が第四の皇子憲仁立て位し
即たまふ是を高倉天皇といふ仍て上皇髪を薙て法
皇と稱したまふ是より先清盛もまゝ髪を薙て淨海
と号し又太政入道といふ清盛もまゝ驕奢を極め
国財の耗消まゝ紙思を無用の土木と興して西八
條の第と造り加之一層別荘と福原を建築し其結構
いふに五歩一樓十歩一間かの唐工よ
その名高き阿房宮も斯やとをり巨萬の財を費し
民の塗炭と顧みず賞罰黜陟盡く已む愛憎は出て依

怙の沙汰も少なきを平氏を怨望せざる者なく
口よ言を孫ど心の内事なりと待輩も多きが中
よ法皇の執事藤原成親曾て大將に任ざるとんて請
しよ清盛が為し拒みまゝ其望を叶はぬのまゝ重盛
宗盛相並んで左右の近衛大將に任ざるとんて大
怒りて居常憤々遂に平氏を滅して一よの國家の安
寧を謀り二よの巴か志望と達せんと思ひ立てハ中
々よ兔やせん角やと苦慮百端深く西光と心を合せ
藏入源行綱檢非違使平康頼法勝寺の別當俊寛僧都

其他平氏を憎むの徒と黨與と結び頃ハ治承元年六月
月潜びやうよ鹿谷の別館に會してうち踞坐酒宴を
事寄せ密事と議し祇園の祭日の殊更市中雜沓をせ
を此虚に乗じて火と平氏の第に縦ち不意に起りて
攻撃ハ一挙よして事成んらる勇ましくと評議決せ
し其折うう如何なるらん表の方何やら俄に騷がし
く繋ぎ置たる成親の乗馬が物ふや怖たりらん吼り
狂つゝ暴出せしが馬丁等の手より餘りアレヨくと決く
のこ此方の斯と知らざれを密事迅くも洩聞え敵押

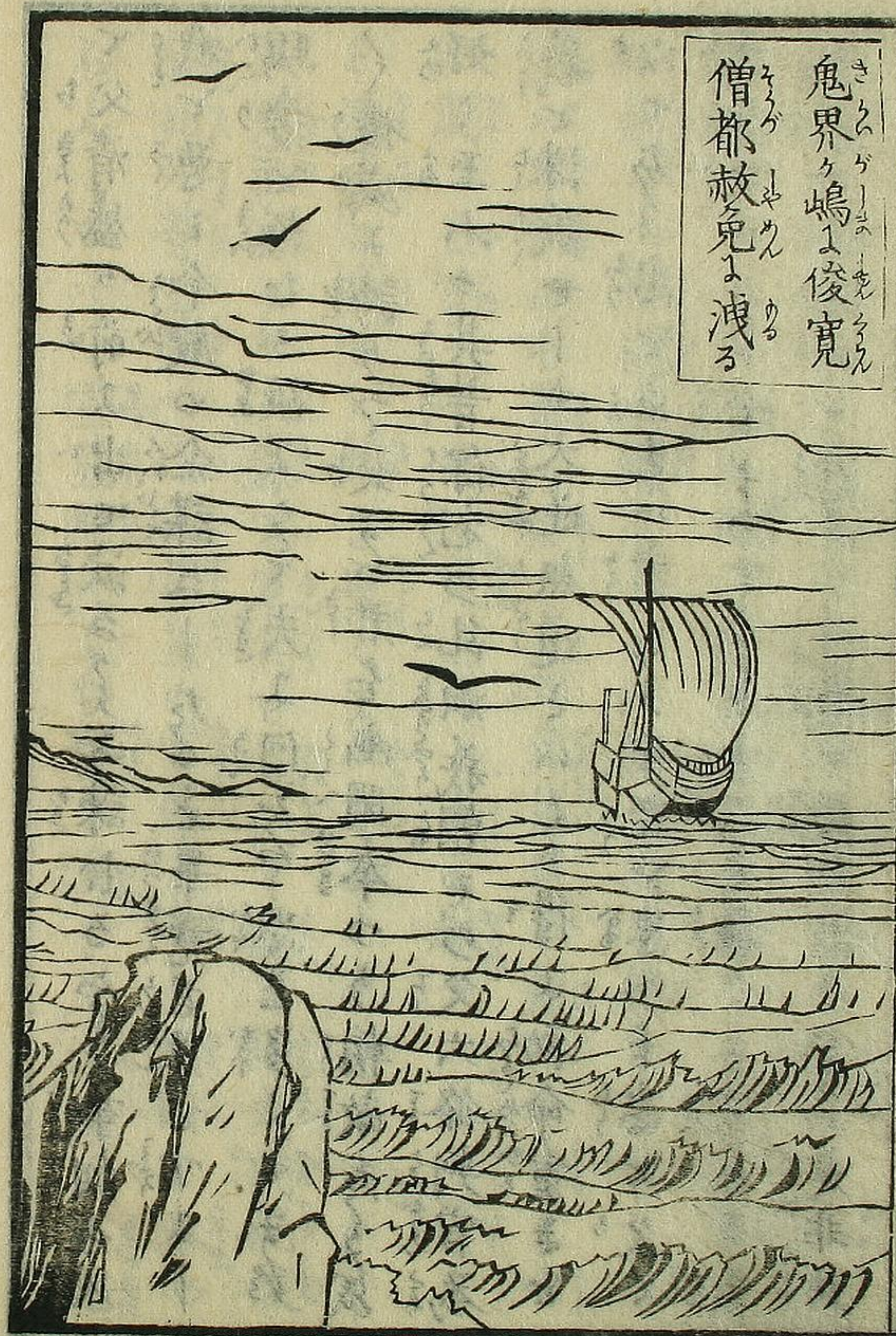
寄せしと思ひ僻め列席まゝたる面々が驚きまざる
起上る機會は傍の酒瓶とハタと其場は蹴仆したる
を俊寛透さる般振立て鎮まうたまへ各方事既に平
ぎたり夫酒瓶と瓶子といへを平氏と訓音相似たり
今密事と議まると當り瓶子と爰は蹴仆せしへ取も
直さる驕る平氏を仆まの兆と知らきたり味方を取
ての良幸先まづおの通りと酒瓶と取るより迅く柱
と目掛けカは任しと投付とば落花微塵と飛散しり
勇りの智ある俊寛が機轉の詞は一坐の面々をみ手

を拍て動搖めきつ尚も手筈と謀一合せ此日ハ各々
散會せしが法皇も豫トめ此企謀を知ると虫も知ら
ぬ顔して打過つ暗よあま成援けたり然るころうま行
綱ハ卑怯めを事の成ざるを先見ぬ一盟約ハ背き心
と変ト自首して罪と免れんと事の趣き一伍一什と
か清盛ハ告ると聞き驚くと一方ありて是ハ油々
き大事よとそと急よ軍兵と催促し直よ師光成親俊
寛西光等を捕へ遂よ法皇の宮殿よ迫り幽閉し奉つ
らんとせしと重盛聞てうち驚き急ぎ六波羅よ立起

て父清盛ガ前よ出で泣なぐり諫むるやう拳朝の人
我と惡し今般の企謀ぬ一たるを畢竟君恩を叨よ
驕奢を極むる故よと夫よ何ぞや恐且多くもまは
く權威よ誇りつ父よハ君を幽閉奉つり朝敵たご成
好と玉ふと其昔保元の乱源義朝その父六條判官為
義と誅戮せし由大逆無道といふを得よ勅命重きと
以てあり忠と立まば孝ありて孝と思へを忠と久く
忠孝両まごり全せん古人を難しと宜なる哉
重盛の進退此よ窮まる此義と思ひたまつるハ是非共



鬼界ヶ嶋は俊寛
僧都赦免は洩る



思ひ止まりたまふ人死を決したる重盛が一世の諫言を
 用ひかくば親とりのど是非もあらず孝を捨て忠を
 立て王事の勤る敵味方父は又向ふ不孝の罪偏にお
 宥り下さるべしと真誠面を顯して諫むる詞は一座
 の人々為る感動せざるはなく猛心もうち凋れ兩袖
 濡れ村時雨涙ぞ人の誠ある清盛漸やく心も解け怒
 りを鎮めて成親以下孰も重盛が寛大の處置に出
 たる流罪と決り成親と備前と成経康賴俊實と鬼界
 島と流したりかくて後重盛へ父の驕奢と憂苦の餘

り世を果敢るまで熊野に詣りて死を祈りて帰ると間
 もなく病に浸され打臥し醫藥も効驗ならずを
 四十二年と一期とまゝ歸らぬ旅の死出三途遂に鬼
 藉に入りたるは惜むる餘る賢者ありと朝野拳ツク
 歎息せしとを話頭轉て牛若の鞍馬山に入りしより
 春と暮と秋と過て金鳥玉兔の足橙迅くもなや十一
 歳と成たる頃母の常盤の清盛の寵愛頓に衰へる餘
 義なく出て人よ嫁せし操と破りて操と立て清盛
 の意に従ひて和子の命全ふせし左も右もなを事

なまど又もや他人は嫁したるへ何等の思想も出さ
るう今之を評さんよ淫を貪り一身の栄華を思ふよ
過むして如何も心得づるなど無用の評言の休
題つ牛若嘗て家譜と見て始る吾身の素性と知り懐
既悲歎やる方なく父が會替の耻を雪ぎ驕る平家と滅
し身を立て家を興さざる男兒と生れし甲斐ゆる
し思へむく無念やと夫より晝の文事と勤め兵書と
繙き学と修一夜の昏は寺と抜出で山より昇りて立樹
を相敵よ自然と得たる小太刀の迅業身の軽きもの

飛鳥の如く牛若熟々思ふやう天下は大事と挙る者
輔翼多けむ成難し我不思議ふもかくまをよ得さ
る武藝のつと雖も死物の敵手のみりくろ實地の益
よ立ぬ中知れず幸ひ當時平氏の武士洛中の市街を
横行し町人百姓を虐げる財を掠め慾と恣よし傍若
無人の拳動りる也諸人も深く難義をまよしいでや
彼奴等と懲さんため我腕力と試し見ん若し手は餘
る者ありを夫を味方よ引入るあと成謀るよ如しと
しと思慮忽地決せしつべその夜よりしと更なる待

日本書紀 卷之八

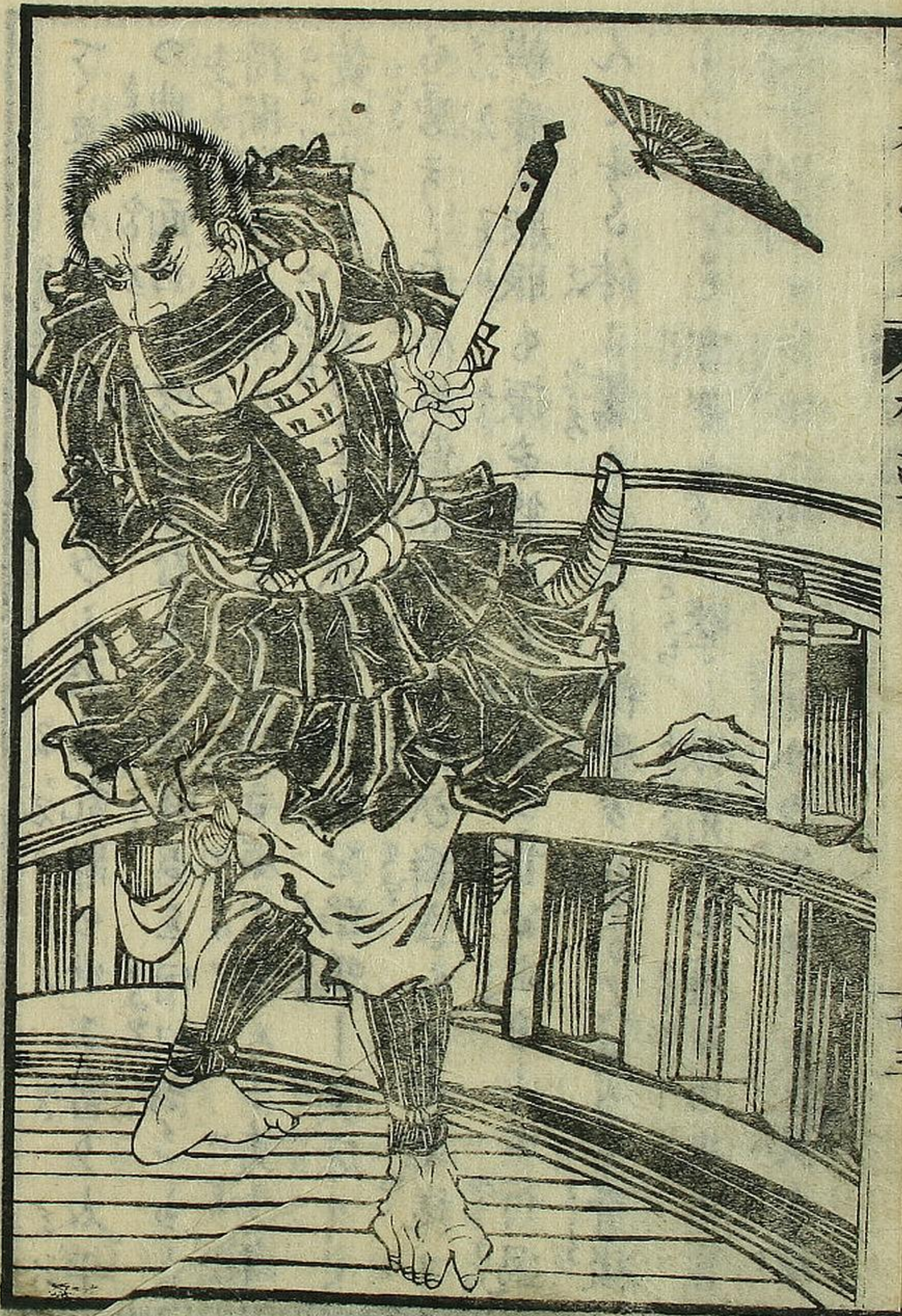
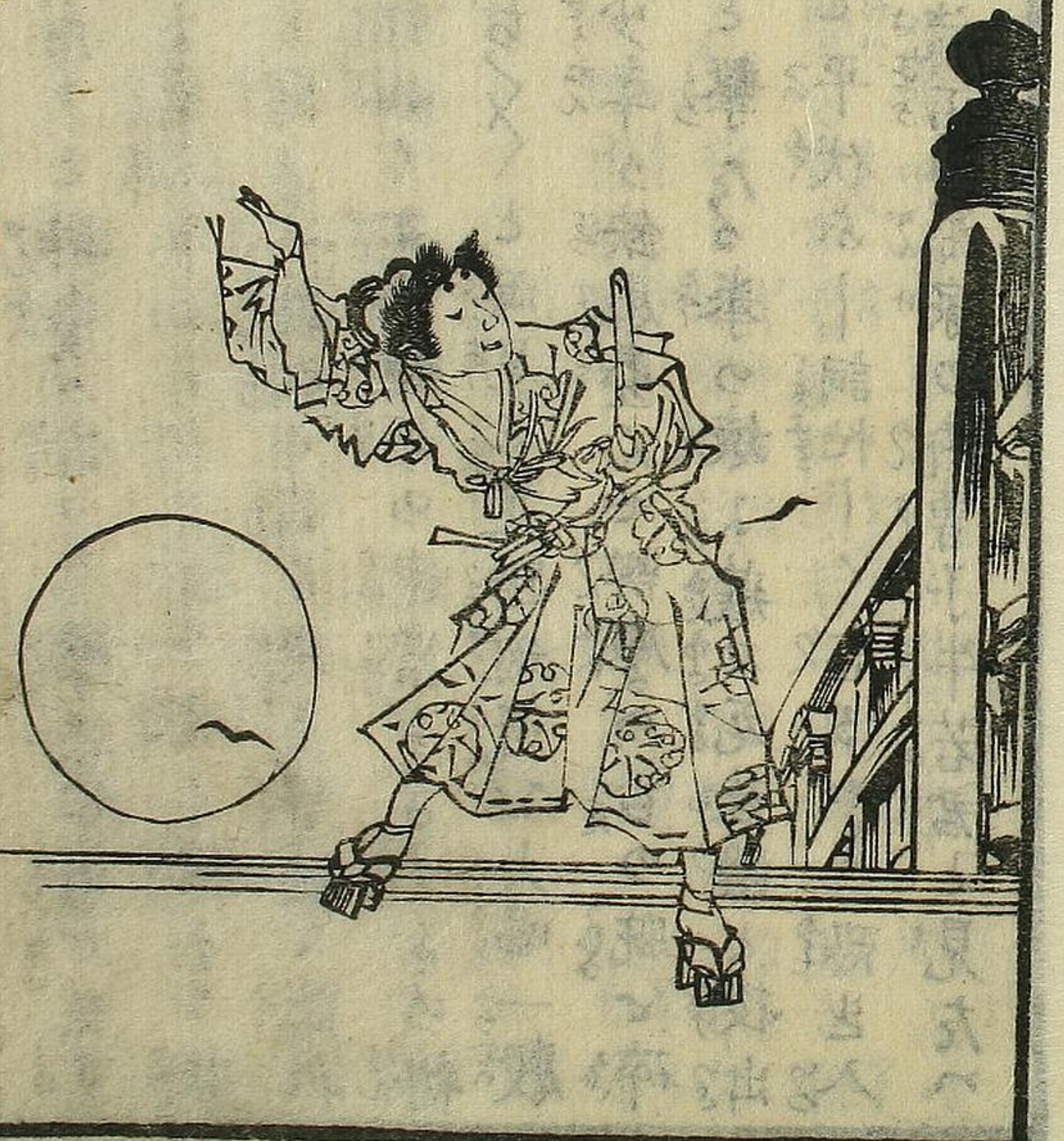
ち洛中の街を徘徊しつ五條の橋の傍りて平氏の武士と待伏るし撃果しつ立去る斯なる事夜毎をば誰りふとなく源家の公達牛若丸が五條の橋にて千人斬とみし玉ふと喋々世間と言嘩せど誰も姿を見認めし者多く風評つみせ高うりたる爰に又叡山の學寮武藏坊は辨慶といふ荒法師なり身丈丈餘臂力又衆を勝て経を誦し佛に仕ふるの業を深く嫌ひ降魔の利劍も是ぞ此國家を治むる為るよ今斯平氏の勢力熾んよ皇威に曾て振張せざるを歎息し

て在る折柄かの風評を聞知りて是ぞ正しく源家の公達牛若丸も在まき望む所のかん大將蛇を一寸よして其氣を現し梅檀の双葉より芳しとる未頼母しき事みこそ夫とを名を伴る曲漢ありば思ふ存分懲りる呉ん兔は角風評のよまき其信偽を知るよ由みし出會し上にて剛臆を試し見んとを捷徑ありめと符節を合する牛若辨慶思ひの同一鴨河の流を盡せぬ磧道頃しを時ハ仲秋の空も懸たる明月を一面の銀鏡を磨たる如く帰るに帰りに行く我身の

影も暗うぐ白晝と欺く夜の景色千草も鳴く蟲の
音も何れ無常と告渡る遠山寺の鐘の聲寂滅為樂
と消てゆく物淋しき道理あるうか此頃巷の風説
は聞怖るしと誰一人夜道と辿る者もふし辨慶五條
の橋の真中は薙刀杖は仁王立ち眺望も飽ぬ明月の
夜景も見惚と愀然と歎息ありて獨言満とバ欠る平
氏の晩運欠初と源氏の満る時来り世の盛衰栄枯
得失造化の精巧妙なる哉と叫き畢るその折うと遙
は聞ゆる笛の音夜風も連て近づくもぞ辨慶耳と側

て是る心得ぬまきみうね今乱離の世は當り太平
の曲と面白く吹まきむとそ奇怪なは何奴あるのと
待間程なく婦人よーと毛見欲き威丈高なる美少年
黄金造の小太刀を帯び高き下駄と踏鳴し奥床しく
も勇ま死威風儼然四方を拂ひ瞬きもせも見送る
辨慶は眼も振む悠々と尚笛の音と止むして行過
んとする体も驚きまらうと辨慶は是ふんめりと背後
より物とも言むたが一撃と振見らむ薙刀の光りよ
吐嗟少年が身体は両断と思ひの外ゆるりと反を身

千里の馬
伯樂の値
君臣の
契約



の練磨仕損下たりと辨慶が焦ッく撃込む薙刀の下
と潜りて欄干は飛上るよと見るより迅く腰ある鉄
扇抜取つさゆいと開き指招ぐ前は現と背後は隠れ
蝶鳥鴉蟲の飛行如く玄々微妙の速業はさしその辨
慶抗ひの鉢たたくくと両足三足踏巡所を大喝一敵
飛込と来つ少半が鉄扇疊んで辨慶の右の腕と碎
らるるをうり丁と撃たる拳の練は薙刀瓦落離と投出
大地へハツと平伏ふ詞忙しく言るやう恐入
たる君の本事流石の源家の御曹子牛若君と見た

僻目う名告るも嗚呼ある事なごう某氏事ハ敵山の
僧徒よりして辨慶と申さ者よの頃巷の風説を聞き聊
う腕に覚えなれば我が剛臆を試せし上お味方申さ
ん所存もく今の無禮を致せしなり憐れ願くは自今
以後召使ひたまらるべ犬馬の勞も何り厭えんと思
ひ入たるその為体星と指さし一言しかの少年は莞
爾と打笑と頼母しき其詞推察し遠く吾らを義
朝が遺子牛若あり我も如思ひし故夜毎は此等を俳
徊する味方と募れど誰一人是ぞと思ふ者もなし然

刀編

七

今夜不圖も足下は値偶まりたりたるは百萬の味方
 と得たるより遙に勝る吾が依び驚才を嫌ひ玉を
 は是より主従三世の約束望む所と辨慶の鮮血を吸
 りて盟約を固め後日の再會と約しつゝ右と左は袂
 と分ち別きことと鞍馬山叡山さして帰り行いと
 も不測の値偶まり

通 俗 日本小史初編下巻終

大坂	前川源七郎	越後三條	青柳正兵衛
同	岡島真七	同	丸屋音八
紀州和歌山	津田源兵衛	同	番場吉次郎
阿州徳島	坂井萬吉	同	村山長太郎
遠州掛川	三原屋甚藏	同	山口萬吉
同	天井金藏	同	竹屋利七
三州豊島	泉屋兼藏	同	浅間屋長七
尾州名古屋	永樂屋東四郎	同	嘉坪屋由右門
同	美濃屋代助	同	目黒宗内
同	中村重兵衛	同	佐藤友吉
甲府山梨	内藤傳右門	同	越中屋與八
同	五明堂正八	同	浅野六平
同	小西屋庄左門	加州	近 八郎右門
		金澤	

同	駿州靜岡	武川半七	同	木屋平八
同	今津美之助	同	同	抽水甚兵衛
同	大和屋利兵衛	同	同	岡本榮作
同	曾比屋平七	同	同	中村嘉兵衛
同	翁屋重兵衛	同	同	西村重兵衛
同	高梨與左門	同	同	齋藤八四郎
同	厚木	同	同	近江屋周助
同	橫濱弁天通	同	同	光白屋清次郎
同	元町	同	同	都田誠
同	武州熊谷	同	同	白根屋藤五郎
同	近江屋平吉	同	同	島屋兼吉
同	杉浦平左門	同	同	萬屋長五郎
同	好文章正平	同	同	十一屋源助
同	下總佐原	同	同	羽前山形
同	境町	同	同	上總東金北村甚左門

同	豆州三島	堺屋又三郎	同	高田為次郎
同	常州太田	會津屋茂兵衛	同	長谷川虎三郎
同	野州足利	山木屋金太郎	同	田宮五郎
同	今市	中村宗兵衛	同	萬屋利七
同	上州前橋	吉田屋長兵衛	同	本間金之助
同	伊勢崎	橋本屋文次郎	同	角屋直治
同	高崎	川水屋平吉	同	熊登山五右門
同	富岡	龜井屋卯兵衛	同	佐々木長藏
同	沼田	關文堂文次郎	同	三陸屋利兵衛
同	藤岡	塚田屋佐太郎	同	及川甚七
同	伊香保	松野屋貞吉	同	牟岐鉄五郎
同	信州長野	小林源二郎	同	壺屋養藏
		小掛屋喜太郎	同	澤田正助
			同	盛岡

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
上田	池田	鼠屋	葛屋	榎屋	精草堂	藤松屋	水琴堂	諏訪	飛騨	越後	同	同
磯左門	政教	甲造	伴五郎	重兵衛	八十八	禎十郎	為吉	屋機	高山	水原	三條	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
八戸	仙臺	陸奥	青森	渡島	北海道	札幌	磐城南	仙臺	越中	越後	橫濱	同
石岡	渡邊	菊地	柿崎	菊地	魁文	田村	浦山	山下	國本	淺間	岩見	同
吉十郎	善七	正助	忠兵衛	儀三郎	社	善兵衛	太郎	平吉	吉右門	傳右門	巳之助	同

版權 明治十四年四月三十日
 免許 同十五年一月出版

編輯人

渡邊 義方

大阪府平民

日本橋區濱町三丁目
 壹番地 寄留

出版人

辻岡 文助

東京府平民

同區橫山町三丁目
 二番地

